

松本清張の世界

—その人生と文学—

田村 栄



松本清張

界

—その人生と文学—

田村
栄

光和堂

田村 榮（たむら・さかえ）

一九一九年東京南千住に生まる。
三二年慶応商工一年生のとき慶大の「映画芸術研究会」に入る。三三年映画監督五所平之助を中心とする「スタジオ・F社」結成に参加し、映画芸術を学ぶ。
四二年病氣療養のため慶大日本史学科を中退。一〇年の療養生活中「アララギ」に属し短歌に熱中する。戦後学校教師、私塾経営等の傍ら近現代日本文学の研究に携わる。一九八一年四月脳内出血で倒れたが不屈の訓練により左手で書き「一步一步の記」「春の別れ」等の作品を発表。九一年一〇月一八日没。
主要著書『石川啄木』『胸の中の泉（歌集）』『松本清張とその人生と文学―正・続（旧版）』『新田次郎』

松本清張の世界

―その人生と文学―

一九九三年四月二十六日
一九九三年五月十日

印刷
発行

著者

田村 榮

発行者

草鹿直太郎

印刷所

第二整版

発行所

(株)光和堂

〒170 東京都豊島区西巢鴨一―一五―四
電話〇三―三九一―八一四二―一 振替(東京)一六八四一四

＊定価はカバーに表示してあります。

© FUMIE TAMURA 1993

ISBN 4-87538-100-X C0095

Printed in Japan.

松本清張の世界——その人生と文学——
目次

1 貧窮の長子 文学的出發まで 7

- 木綿の手ざわり「半生の記」 8 少年きよはる 9 心惹かれた作家たち 12 芥川竜之介と菊池寛 14 版下画工十年の修業 21 朝日新聞九州支社へ入る 24 不合理な差別への反発 25 召集と軍隊生活 28 敗戦と買出し旅行 30 空しい勤め人生活の後に 32

2 埋もるる志への悲歌 初期作品の性格 35

- 処女作「西郷札」 35 芥川賞受賞作「或る『小倉日記』伝」 40 初期五つの短篇 44 清張の歴史小説論（「奥羽の二人」「転変」「酒井の刃傷」等） 49 「断碑」の鮮烈な人間像 55 「ヒューマン・インテレスト」に発する作品群 59

3 悪の社会性 推理小説への出發 65

- 推理小説への道―「張込み」「顔」について 65 松本の推理小説論 69 「純文学」「大衆文学」「中間小説」への言及 72 動機の社会性について 76 社会小説と推理小説 79 「多元描写」は不自然になり易い 81 「声」「共犯者」「背広服の変死者」等と歴史小説数篇 83 短篇小説の佳作相つぐ 90 清張ブームのきっかけ「点と線」「眼の壁」 97

4 芸と美について 『小説日本芸譚』の世界……………111

- 「運慶」に託した写実の精神 112 執念の芸術家「世阿弥」 115 「千利休」——政治と芸術を考える 117 清張の雪舟観 121 利休を超えられなかった「古田織部」 122 感慨をこめた一篇「岩佐又兵衛」 125 「小堀遠州」——妥協に耐えて技をみがく 127 「光悦」「写楽」「止利仏師」 129

5 庶民の哀歎 社会派推理小説の確立……………133

- 「無宿者」への共感 133 「ある小官僚の抹殺」 139 社会派宣言「黒地の絵」 146 代表作の一つ「ゼロの焦点」 148 モーム『コスモポリタン』の形式「黒い画集」 150 「裝飾評伝」と「眞贋の森」——権力にいどむ 156 心理描写の成功「二階」 160 牟礼事件の提起するもの 162 松本清張という人 164 清張作品中の異彩「波の塔」 168 「霧の旗」が投げかけているもの 170 文芸春秋読者賞受賞「小説帝銀事件」 173 聖職者を告発する 174 精力的に発表されたその他の作品 177

6 告発の記録 「日本の黒い霧」「深層海流」及び「現代官僚論」……………181

- なぜ「日本の黒い霧」を書いたか 181 大岡昇平の批判について 184 時代の証言者、松本清張 187 権力の本質をあぶり出す「深層海流」 193 美しい文章より真実の文字を 197 痛憤の書「現代官僚論」 199

7 或る絶頂 「わるいやつら」「砂の器」など……………211

知的労働の限界に関する実験 211 二つの推理大作 214 或る終戦秘録

「球形の荒野」 226 「考える葉」の提起するもの 234 「高校殺人事件」

237 出世主義官僚の生態を描く「山峡の章」 238 三つの短篇「部分」

「駅路」「誤差」 241

8 人間 そのへけものみち……………249

9 ある女たち 清張的「永遠の女性」像……………263

松本清張の世界

—その人生と文学—

1 貧窮の長子 文学的出発まで

松本清張を怪物と呼ぶ声はジャーナリズムの上でも、一般庶民の会話の中でも少なくない。歴史的に大なる創作を積み重ねるかたわら、占領下日本の黒い霧を衝いて独自の記録文学とし、政論家ふうの官僚批判を書くかと思えば、二・二六事件を頂点とする昭和初期の現代史に歴史家はだしの犀利な筆を振るう。戦火のベトナムへ赴いては人民的立場で現況報告を行ない、知識人の国際会議のため時には海をこえ、国内ではさまざまな政治問題について常に革新的立場から発言し、行動に参加する。最近（一九六六年以来）では、古代史、古代文学についての研究に多くの新説を提起している。

著作だけから見ても、文壇進出以来ほぼ二十五年の間に五百篇近い長短篇を発表・蓄積した驚くべき精力家、このような作家が、果たして他にあるだろうか。最近完結した文芸春秋社版『松本清張全集』三十八巻すら、彼の今日までの業績のすべてを収録したものではないのである。然も、次々に刊行される彼の小説書はいずれも十万余部以下の売れ行きに止まったことがないと言われている。この大衆的な人気の秘密はどこにあるのだろうか。

以下、私は、文学作品を中心にしながらなるべく網羅的に、松本清張の世界の諸特徴をできるだけ解り易く鳥瞰ちようかんして見たいと思うのである。

木綿の手ざわり「半生の記」

松本清張（まつもと・せいちょう）は明治四十二（一九〇九）年十二月二十一日、福岡県小倉市（現在の北九州市小倉区）篠崎に生まれた。二人の姉が嬰兒のうちに亡くなったので、彼は一人子として育てられた。清張は本名で、「きよはる」と読ませている。

清張の父峰太郎は、鳥取県日野郡矢戸村（現在の日南町矢戸）の田中家の長男として生まれたが、峰太郎の母は、峰太郎を身籠ったまま事情があつて離別され、その結果、峰太郎は生まれるとすぐに同県西伯郡米子町（現在の米子市）の松本米吉、カネ夫婦の養子としてもらわれていった。峰太郎の母は峰太郎を養子に出したあとで復縁しているが、この間の事情は解らないと、清張自身がその「半生の記」に記している。

「半生の記」は、清張が既に流行作家としての地歩を固め終わった昭和三十八（一九六三）年、五十四歳の時に「回想的自叙伝」と題されて、初め雑誌『文芸』に連載されたものであるが、私は、清張の全作品中、ひときわこの作品が好きである。飾り気がなく、必要なことだけを簡潔に書くことに徹したその文体は木綿の手ざわりを思わせるが、それだけでなく、清張の思考方法を解く鍵がいくつも秘められた好個の清張入門書となっている。以下、作家として世に出るまでの

清張にかんする記述は主としてこの著による所が多い。

少年きよはる

清張の父峰太郎は小学校を卒えると役場の給仕となり、漢文を独習したらしい。十七、八で松本家を出奔した峰太郎は、明治二十七（一八九四）年には、広島県警察本部長の家で書生となっている。書生をしながら法律を学び、弁護士資格をとるもくろみを抱いていたらしいが、この希望は警察署長の転任で挫折し、広島衛戍病院の看護雑役夫に転じた。後年、峰太郎は議論好き、歴史物語好きで、労働ざらいの、いくらか遊び人風の間人として貧窮の生活を送ったが、この「議論好き、歴史物語好き」という性格は、後年の作家清張の作品傾向に明らかな影を落としてゐる。殊に、冬の夜の炬燵に足を突っ込みながら「父の手枕で聞く太閤記など」がどんなに面白かったかは、「半生の記」の中でも目立ったエピソードの一つとなっている。しかし、「議論好き」の方は、清張にあつては少年時代からの性格ではなく、それが顕在化するのには作家として自立するようになってからのことである。少年時代の彼は、むしろ、無口な、気の臆しがちな性格だったようだ。少年の日の清張がそんなふうの口の重い、陰りがちな性格だったというのは、一つには、貧乏ではあつても掛け替えない一人子として、父母からも祖父父母からもひたすら大切に育てられたためでもあつたらう。

峰太郎は広島で働いているうちに、百姓の娘で、紡績女工だった岡田タニと結ばれ、やがて九

州に渡った。日露戦争直後の炭坑景気にひかれたためでもあったろうか。明治四十三（一九一〇）年、清張はまだ満一歳の乳飲児であった。

峰太郎夫婦が移り住んだ下関市壇ノ浦は、平家滅亡の旧蹟地として知られている。海を見下ろす街道に面した彼らの家は、その半分が石垣からはみ出て海に打った杭の上に乗っていた。米子から呼ばれた峰太郎の養父母松本米吉・カネ夫婦も同居して、彼らは街道を行く通行人相手の餅屋を始めた。

この頃、峰太郎はその餅屋稼業に精を出したわけではないらしく、示談屋、安相場師、露天商人、魚の行商人などあらゆる雑多な職業を転々としたようである。しかし、「生来の楽天家」だった峰太郎は暗い顔一つ見せなかった。妻タニの方は逆にきわめて「悲観的な性格」で、ひどく口やかましかった。呑気で家の手伝いなど見向きもしない峰太郎と、陰気で愚痴の絶え間のないタニとは、一生うまくいかない夫婦だった。峰太郎は、若い頃、学問について一定の志を保っていて、どんな暮らしの中でも新聞をよく読み、生涯、床屋政談を好んだが、タニの方は眼に一丁字もなかったのである。「半生の記」の序章は「私の幼時の両親への記憶は、ほとんど夫婦喧嘩で占められている」という一句で結ばれている。

貧しさはきびしく、清張には兄弟も姉妹もなかった。「少年時代には親の溺愛から、十六歳頃からは家計の補助に、三十歳近くからは家庭の両親の世話で身動きできなかった。——私に面白い青春があるわけではなかった。濁った暗い半生であった」という清張の感慨は何の誇張もない

眞実であつたらう。

峰太郎は一時家を出てしまったことなどもあって、その時、タニは清張を連れて隣家の蒲鉾屋に身を寄せ、そこで女中代わりに働いた。蒲鉾屋一家は「自分たちで食い散らした魚の骨を、もう一度ゴツタに煮て吸物にし」清張親子に飲ませたりした。タニは物陰で涙をこぼした。こうした辛酸の末、それでも大正十二（一九二三）年、清張が高等小学校二年の頃には、峰太郎夫婦は小倉市紺屋町に小さな飲食店を経営し、女中を三人も使うという所まで漕ぎつけたのだが、それも束の間、峰太郎生来のずぼらと怠け癖から店は次第にさびれ、結局、清張は中学への進学をあきらめなければならなかった。

大正十三（一九二四）年、十五歳で高等小学校を卒えると、清張は大阪に本社があった川北電機株式会社小倉出張所の給仕になった。月給十一円である。早稲田大学の講義録をとりよせて勉学を志したが、その資料費の送金も継続し得なかった清張は、その頃、新聞記者になるのを儚い夢はかなとしていた。

川北電機が不況で倒産するまでの三年間、大学の講義録も、夜間に通った英語学校も物にならなかつた少年清張は、道で中学に進んだかつての級友に逢えば横道に身をひそめるといったような鬱屈うづくした気分の中で、次第に文芸書に親しむようになって行った。と言ってもそれは、自ら文章を作ろうとする姿勢の文学修業というようなものではなく、銀行に使いに行つては待つ間の椅子でむさぼるように文庫本を読むと言つた形の濫読に過ぎなかつたのである。

心惹かれた作家たち

その頃の彼が最もひかれた作家は芥川竜之介であり、菊池寛であった。戯曲では岸田国土を特に好んだ。外国文学では、ドストエフスキーやゴッリキイも読んだが、結局、ポオに最も心をひかれた。当時、『文芸春秋』に連載中だった徳田秋声の山田順子との恋愛物などは、何のためにそんなものを書くのか彼にはどうしても理解できなかった。

「明治時代の作家では、漱石、鷗外、花袋、鏡花など一通り読んだが、自然主義作家にはそれほど惹かれなかった。花袋の場合は『蒲団』『一兵卒』などよりも、前から彼が書きつづけていた紀行文のほうに惹かれた。それから、正宗白鳥の『泥人形』というのを読んで一べんに退屈した。どうも私小説作家のものは私の好みに合わなかったと思う。世評の高い志賀直哉の『暗夜行路』も、それほど魅力は感じなかった。むしろ『和解』のほうに感動を覚えた。それから、『網走まで』『小僧の神様』『城の崎にて』などは、どこがいいのか分らなかった。そのころの私は、小説にはやはり小説らしいものを求めていたようである。／そんなことで、芥川や菊池に私の興味が惹かれたのは仕方がない。特に菊池の『啓吉物語』と、芥川の『保吉の手帳から』は同じ私小説の系統でありながら、いわゆる自然主義作家のものよりずっとおもしろかった。自然主義作家の、あるがままのものをあるがままに書く、という平板なものには、退

屈でついで行けなかった。」

これらの文学的回想の断片を読むと、今日の清張作品の諸傾向との関連がかなりくつきりと浮かび上がって来る。たとえば、志賀直哉の作品について、「暗夜行路」よりも「和解」に感動をおぼえたとき、「網走まで」「小僧の神様」「城の崎にて」などは「どこがいいのか分らなかった」と書いているのなども、たいへんおもしろいではないか。「暗夜行路」のように世評の高かった作品でも、彼には平板に感じられたのであろう。この作品にこめられている典型的日本人の自己への忠実さとか、人生全体に対する誠実な態度などよりも、もっと「小説らしい」物語的組み立てを彼は欲していたにちがいない。「網走まで」のように人生の一断片として掬すべき味わいを保ちながらも、形としては車中の母子をさり気なくスケッチしたにすぎない作品は勿論、目撃した小動物の死を凝視することを通して深い生への感慨をただよわせた「城の崎にて」でも、その随筆に近い、心境小説ふうな方法が気に入らなかつたのであろう。彼は結局、「和解」のように、志賀文学の中では幾分なりともドラマティックな感動のもしあがる構成の作品を好んだのである。正宗白鳥の「泥人形」を読んで彼は退屈した。退屈な人生を退屈に書いて何の意味があるのかという所であつたらう。徳田秋声の山田順子もののように人生の痴愚をさらけ出した文学を無意味と感じたというのも、へそこに人生があるから描く」というだけでは物足りなかつたのだ。描くからにはそこに、ただ「ありのまま」というだけではない、何らかの意義または意図が

なければならなかった。外国文学ではポオに最も共感したというのも、彼として当然の帰結であつたらう。

それにしても志賀の「小僧の神様」についての彼の評価には興味を覚える。この作品は短篇としてきわめて組み立てのあざやかな作品で、作り方の点では、当時の清張が好感をもつてもいいはずのもののだが、「城の崎にて」などと同様に「どこがいいのか分らなかった」と言い捨てている。給仕として働いていた彼にとつて、金持ちの気まぐれな善意に翻弄ほんろうされたにすぎないとも言える。丁稚小僧を描いた「小僧の神様」は、どこか素直に受け取ることができない、自分が馬鹿にされたかのような内容の作品として眼に映じたのではあるまいか。中学に進んだ級友と道で会うことを絶えず恐れていたような当時の彼の生活感情が、「小僧の神様」への無意識な反発となつてたまたまにじみ出たものとも見られ得るだろう。階級の見地などというほどに大げさなものではないにしても、その感じかたにこそ、彼の人生に対する「立場」が生じ始めていたのである。

芥川竜之介と菊池寛

芥川竜之介や菊池寛については、単行本『半生の記』（一九六六年初版）ではけずられているが、雑誌発表の原文にはさらに次のようにも書かれている。

「……菊池の『啓吉物語』と芥川の『保吉の手帳から』は同じ私小説の系統でありながら、い